

Discussion Paper Series

University of Tokyo
Institute of Social Science
Panel Survey

東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト
ディスカッションペーパーシリーズ

パネルデータを用いた職業アスピレーションと
地位達成間の関連についての分析

An analysis of the connection between occupational aspiration and
occupational attainment using panel data

元濱奈穂子
(東京大学大学院)

Naoko Motohama

March 2014

No.77

東京大学社会科学研究所
INSTITUTE OF SOCIAL SCIENCE UNIVERSITY OF TOKYO

パネルデータを用いた職業アスピレーションと地位達成間の 関連についての分析

元濱奈穂子（東京大学大学院）

要旨 本稿の目的は、パネル調査データを用いて、職業アスピレーションと実際の地位達成との関連の有無を実証的に明らかにすることである。具体的には、高卒 2 年目に希望していた職業の社会的地位が、実際就いた職業の社会的地位に影響を及ぼすと言えるかどうかを検証する。ランダム効果モデルを用いた分析の結果、高卒 2 年目の職業アスピレーションが実際の地位達成と密接に関連しており、この関連は高卒後の時間が経過するに従って強まることが分かった。本稿の結果と先行研究との比較によって、以下の 2 点が示唆される。第 1 に、高卒 2 年目の職業アスピレーションは、現状の客観的認識に基づいた予期として抱かれている可能性があり、第 2 に、高卒 2 年目の若年層の将来展望が、高い層と低い層で二極分化していることが予想される。

謝辞 本研究は、日本学術振興会科学研究費補助金基盤研究(S) (18103003、22223005)・基盤研究(C) (25381122)、奨学寄附金・株式会社アウトソーシング、厚生労働科学研究費補助金 (H16-政策-018)、東京大学社会科学研究所研究資金の援助を受けた研究成果の一部である。パネル調査データの使用にあたっては、東京大学社会科学研究所パネル調査企画委員会の許可を受けた。また本稿の執筆にあたっては、高卒パネル研究会の皆様から有益なアドバイスを多数いただいた。記して感謝申し上げます。

1. 問題設定

本稿の目的は、職業アスピレーションと実際の地位達成との関連の有無を検証することである。具体的には、パネルデータを用いて、高卒後の早期の段階で希望していた職業の社会的地位が、その後の職業の社会的地位に影響を及ぼすのかどうかを明らかにする。

職業アスピレーションは、出身階層やそれまでの教育達成、周囲のロールモデルによる社会化の結果として現出するものであり、このようにして抱かれた職業アスピレーションは実際の地位達成にも影響を及ぼすと考えられてきた。しかし近年、若者の職業アスピレーションがこのような枠組みで把握できなくなりつつあるという指摘が為されている。片瀬（2005）や荒川（2009）は、希少かつ就労ルートが教育システムに規定されない職業を希望する高校生の存在を問題とした。具体的には、プロスポーツ選手や芸能人などの職業である。これらの若者は希望する職業に就くための正当なルートがないために不確実性に身を委ねるほかなく、それゆえアスピレーションは実際の職業達成ルートと結びつかないということになる。

この議論に疑問を呈した林（2012）は、学校卒業後のキャリア形成期の若者を対象として職業アスピレーションと地位達成との関連を再検討し、キャリア形成期の若者は、現在の職業との整合性を保ちながら望ましいと思う職業を決定していることを明らかにした。この結果からは、職業アスピレーションがそれまでの本人のキャリアと密接に結びついていくことが読み取れる。

このように、職業アスピレーションと実際の地位達成との関連の有無については議論が定まっていない。しかしこれらの議論の多くは職業アスピレーションの規定要因を分析するもので、職業アスピレーションを独立変数として実際の職業達成にどのように影響を及ぼすかの議論は想定の外を出ないことに注意が必要である。職業アスピレーションと実際の地位達成との関連の有無を検証するならば、職業アスピレーションだけでなく、その後の職業達成の過程も観察した上で議論を行う必要がある。

そこで本稿は、職業アスピレーションと実際の地位達成との関連があるのかどうかを明らかにするために、職業アスピレーションとその後の職業達成状況を継続的に観察しているパネルデータを用いた分析を行う。第2章では、本稿と同様の問題関心のもとで行われた先行研究の検討を行い、それらの限界を提示する。この限界を踏まえ、第3章では本稿の分析に用いるデータと変数について、その特長もあわせて詳述する。第4章では、職業アスピレーションと実際の地位達成との関連を、ランダム効果モデルを用いた分析を中心に明らかにする。第5章で、結果の解釈と今後の課題を提示する。

2. 先行研究の抱える課題

職業アスピレーションとその後の職業達成状況との関連に着目した研究として、2006年に実施されたJGSSデータを用いた相澤（2008）が挙げられる。ここでの分析によると、若い世代では、中学3年生頃に希望していた職業の社会的威信と初職の社会的威信との間の関連が見られない。この結果から相澤（2008: 89）は、「職業威信から見れば高い職業への希望は、その後の地位達成には有意に影響しない」と結論付けている。

この研究は、職業アスピレーションを独立変数に設定し、実際の職業達成に対する効果を分析しているという点で、両者の関連の解明に近づいていると言える。しかしここでのデータと分析には3つの限界があると思われる。第1に、職業アスピレーションが回顧的に尋ねられているために、忘却などのリスクが避けがたいこと、第2に、中学3年生という時期が職業アスピレーションを計測するのに必ずしも適切でないこと、第3に、地位達成との関連が初職に限定されて議論されていることである。ここでは、第2・第3の限界について検討する。

(1) 職業アスピレーションの測定時期の問題

子どもの段階的な職業的社会化を論じた Moore（1969）は、子どもの職業アスピレーションに対して以下のことを指摘している。すなわち、産業化が進んだ社会では子どもを水路づける強いロールモデルが存在しない。さらに子どもは、マスメディアの影響で多様かつ魅力的な職業に出会うことができる。そのため子どもの抱く職業アスピレーションはしばしば観念的であるが、これはその後の職業的社会化によって修正されていく。この職業的社会化は各学校段階から就労後に至るまで継続的に行われる。

つまり現代において職業アスピレーションを決定することは、「子どもにとっては極めて認知的な負荷の高い課題」である（下村・堀 2003: 261）。さらに高等学校進学率が98%以上で推移する今日、中学3年生の段階で職業に関する重大な進路選択の必要性に迫られることはほとんどなく、この段階での職業的社会化の程度は低いと考えられる。よって、中学3年生時の職業アスピレーションと実際の職業達成との関連がないことは、単に中学3年生が職業アスピレーションを決定するには若すぎることを意味しているにすぎないかもしれない。

林（2012）は、職業アスピレーションは具体的なキャリア形成の段階に移行して初めて本人の客観的な属性・地位に基づいて決定されるようになると述べている。Kerckhoff（1976）は、職業アスピレーションにはこのように現況に基づいて将来の可能性を限定する”expectation”（予期）としての要素があると指摘している。これらを考えると、職業ア

スピレーション計測の時期を高卒後に設定すれば、それは実際の職業達成と関連をもつ可能性が十分にありうる。というのも、ほとんどの人々は高校を卒業する段階で、就職か進学か、進学するとしたら何を専攻するかなど、将来に向けた重大な進路選択を経験する。この経験が、自らの客観的な属性や地位に関する認知の形成を促進すると考えられるためである。

(2) 地位達成の測定時期の問題

第3の限界に関しては、職業達成を初職だけで計測できるのかという問題がある。高卒就職者の約35%、大卒就職者の約30%が3年以内の離職を経験すると言われている（内閣府編 2013）。離職・転職を経験しながらキャリア形成を図るような働き方は、現代の若年者にとって珍しいことではない。若年層の地位達成ルートの複雑化により、初職の地位によってその後の地位達成を予測することが困難になっていることが予想される。

さらに近年の若年層は、初職を得た場での安定的・継続的な就労によってキャリアアップを達成する層と、不安定かつ不利な転職を繰り返す層とに分断されているという指摘もある（佐藤 2009 など）。このように若年層の地位達成が二極化しているとすると、若年層の職業アスピレーションと地位達成が、どの時点を観察するかで異なる関連を見せる可能性も考えられる。よって、職業アスピレーションと職業達成との関連をより正確に検証するためには、初職以降の職業達成過程全体を視野に入れた分析が必要である。

3. データと変数

(1) 使用するデータ

前節で挙げた3つの限界を乗り越え、職業アスピレーションと地位達成との関連をより正確に分析するために、本稿では東京大学社会科学研究所が実施する「高卒パネル調査」のデータを用いた分析を行う。本調査では、wave3（2005年）で希望職業を尋ねる項目が設定されている。その時点での希望職業を回答しているため忘却のリスクはない。また高卒2年目というキャリア形成初期の段階の職業アスピレーションを計測している点で、第2の限界の解決にとっても有効なデータであると言える。さらに、本調査はwave5（2008年）以降、毎年調査時点の現職を調査しているため、長期的な視点で職業アスピレーションと地位達成との関連を論じることができる。この点で、第3の限界も解消することができる。

(2) 注目する変数

職業アスピレーションは、wave3 時の「あなたは 30 歳ごろになったときに、どのような職業についていたいと思いますか」という質問を使用する。この質問では、36 項目の選択肢から希望する職業を 1 つ選択してもらう形式を取っている。36 項目について想定しうる全職業の職業威信スコアの平均を算出し、選択した項目に対してこの平均値を割り当てた。

地位達成を測る指標としては、現職威信を用いる。高卒パネル調査では、現職の職種が 9 項目の大分類のどれに該当するかを、回答者に選択してもらう形式をとっている¹。wave5 から wave9 (2012 年) に観察された全てのケースについて、各選択肢について想定しうる全職業の職業威信スコアの平均を割り当てた変数を「現職威信」変数として使用する。

表 1 職業アスピレーション、現職威信(wave5～wave9)の記述統計量

	N	最小値	最大値	平均値	標準偏差
職業アスピレーション(wave3)	482	39.90	90.10	58.77	9.68
現職威信(wave5)	329	45.65	66.58	53.07	9.04
現職威信(wave6)	365	45.65	66.58	52.63	8.85
現職威信(wave7)	422	45.65	66.58	52.97	8.97
現職威信(wave8)	423	45.65	66.58	53.19	9.05
現職威信(wave9)	457	45.65	66.58	53.18	8.97

4. 分析

(1) 職業アスピレーションと地位達成の基本的関連

職業アスピレーションと地位達成との関連を確認するために、まずは現職威信と職業アスピレーションとの相関を確認する。wave5～wave9 までの全時点で、現職威信と職業アスピレーションとの間には有意な正の相関が見られる。さらに、wave5 から wave8 までの間は両変数の相関が強まっていく傾向が見られた。

次に、相澤 (2008) で地位達成との関連が指摘された父職威信、母教育年数、本人教育年数²と現職威信との相関を確認する。出身家庭に関する変数である父職威信、母教育年数

¹ 高卒パネル調査では具体的な職務内容についての自由記述も求めているが、無回答が多いため今回は大分類のみを使用する。大分類分類の回答と自由記述の職務内容が不一致の場合は、正しい分類に修正を施している。

² 父職威信・母教育年数は、2004 年に実施された保護者調査の回答を用いて作成した。父

との相関は、職業アスピレーションと現職威信との相関ほど安定的ではなく、強くもない。しかし wave7 以降に着目すると、父職威信、母教育年数と現職威信の相関は全て 5%以下の水準で有意であり、特に父職威信と現職威信の相関は wave7 以降で強まる傾向が見られる。このことより、家庭環境も現職威信に一定の影響を及ぼしていると考えられる。

また、本人教育年数は wave6 を除いて有意な正の相関が出ており、相関係数は父職威信、母教育年数よりも大きい傾向が確認できる。教育達成がその後の地位達成に強く影響することがうかがえる。しかし同時点の職業アスピレーションと現職威信との相関と比べると、全時点において、本人教育年数との相関の方が弱い。

従来地位達成に対して影響すると考えられてきた、家庭環境や教育達成は、たしかに現職威信に対して一定の影響力をもっている。しかし、職業アスピレーションと地位達成との関連は、家庭環境や教育達成と比較して相当に強いことが明らかになった。次節では、この職業アスピレーションと現職威信との関連が何を意味しているのかを精査する。

表 2 現職威信と職業アスピレーション・父職威信・母教育年数・本人教育年数との相関

現職威信	wave5	wave6	wave7	wave8	wave9
職業アスピレーション	0.203 **	0.225 **	0.280 ***	0.332 ***	0.263 ***
(N)	178	184	200	193	209
父職威信	0.151 +	0.122	0.174 *	0.177 *	0.196 *
(N)	131	148	162	147	161
母教育年数	0.172 *	0.125	0.174 *	0.227 **	0.160 *
(N)	147	172	181	167	176
本人教育年数	0.163 **	0.083	0.203 ***	0.264 ***	0.259 ***
(N)	327	264	292	281	291

+ : $p < 0.1$ 、*: $p < 0.05$ 、**: $p < 0.01$ 、***: $p < 0.001$

(2) 職業アスピレーション独自の効果の検証

前節では、職業アスピレーションは、家庭環境や本人の教育達成よりも現職と強い関連があることが示唆された。しかし、そもそも職業アスピレーションは、家庭環境や教育達

職威信は、当時の父親の現職の大分類をもとに、本人現職威信と同様の手順（3.2 節参照）で作成した。母教育年数は、母の最終学歴をもとに、中学→9、高校→12、専修学校・各種学校・短大・高専→14、大学・大学院→16 を割り当てた。

本人教育年数は wave5 の時点での最終学歴を使用し、母教育年数と同様の手順で作成した。学歴が wave6 以降に変化することも考えられるが、このようなケースは全体の 4%に満たないため、wave5 時の最終学歴を使用して問題ないと判断した。

成の影響を受けて形成されることが指摘されている（片瀬 2005 など）。したがって、職業アスピレーションと現職威信との関連が、実際は家庭環境や教育達成の間接効果を表しているにすぎない可能性もある。そこで、職業アスピレーションと現職威信との関連が、これらの変数からどの程度独立しているのかを、ランダム効果モデルを用いた分析により検証する。

従属変数は、wave5 から wave9 までの現職威信である。全 wave をプールしたデータを用い、ランダム効果モデルで推計を行った結果が表 3 である。

モデル 1 では、父職威信、本人教育年数が本人の現職威信に有意な正の効果をもっていることが読み取れる。これに職業アスピレーションを投入すると（モデル 2）、本人教育年数の有意な効果はなくなる。加えて、職業アスピレーションを投入したことにより、父職威信の偏回帰係数が大きく下がっていることもわかる³。このことから、父職威信・本人学歴は、一定程度本人の職業アスピレーションを媒介して本人の現職威信に影響すると考えられる。しかしモデル 2 では同時に、職業アスピレーションが単独で有意な正の効果を持つことが示されている。職業アスピレーションが家庭環境や教育達成の媒介的効果しか果たさない変数なのであれば、これらの変数を統制しているモデル 2 で職業アスピレーションの効果は確認できないはずである。以上の分析から、職業アスピレーションは家庭環境や学歴に回収されない独自の効果をもっていることが読み取れる。

さらにモデル 3 で職業アスピレーションと時点との交互作用項を投入したところ、交互作用項が単独で有意な正の効果をもつことが確認された。つまり職業アスピレーションの効果は高卒後に時間が経過するほど強まり、このため、高卒 2 年目の職業アスピレーションが高かった者と低かった者では、その現職威信の差が時点を追うごとに広がっている。

³ 異なるモデルであるため数値の単純比較はできないが、偏回帰係数が小さくなる傾向は明らかである。

表 3 現職威信を従属変数としたランダム効果モデル

	モデル 1			モデル 2			モデル 3		
	B	S.E.		B	S.E.		B	S.E.	
父職威信	0.212	0.090	*	0.156	0.089	+	0.153	0.090	+
母教育年数	0.331	0.565		0.192	0.547		0.151	0.549	
本人教育年数	1.169	0.540	*	0.707	0.542		0.705	0.545	
女子ダミー	-2.887	1.557	+	-3.581	1.519	*	-3.655	1.525	*
時点	0.192	0.162		0.183	0.162		0.240	0.160	
職業アスピレーション				0.253	0.084	**	0.141	0.092	
職業アスピレーション*時点							0.054	0.017	**
切片	21.665	9.628	*	33.557	10.086	***	34.331	10.126	**
N	387			387			387		
sigma_u	7.908			7.592			7.640		
sigma_e	4.157			4.157			4.089		
rho	0.784			0.769			0.777		
R-sq: within	0.005			0.005			0.041		
between	0.137			0.205			0.200		
overall	0.143			0.201			0.206		
Wald chi2	19.43	**		29.91	***		39.16	***	

注 職業アスピレーションはセンタリングした値を用いている。

注 時点は、wave5 を 0 とした連続変数として投入している⁴。

+ :p<0.1、*:p<0.05、**:p<0.01、***:p<0.001

5. まとめと考察

(1) 本稿で得られた知見

本稿では、職業アスピレーションと現職威信には関連があり、さらにその関連は家庭環境や学歴の媒介だけでは説明できないことが明らかとなった。この結果と相澤（2008）の結果を比較することで示すことができる知見は以下の 2 点である。

第 1 に、高卒 2 年目の職業アスピレーションは、実際の達成と密接に関連するというこ

⁴ これにより、wave5 の時点での職業アスピレーションの効果を基準として、wave6 以降の職業アスピレーションの効果の変化を見ることができる。

とである。相澤（2008）が指摘した近年の若年層の希望職業と初職威信との無関連は、中3時の職業アスピレーションに注目した場合の傾向であった。しかし高卒2年目というキャリア形成初期の職業アスピレーションに注目すれば、若年層の職業アスピレーションが地位達成と関連しなくなっているわけではない。若者は具体的なキャリア形成の営みの中で、職業アスピレーションをより現実の可能性に沿ったものへと修正していくようだ。

第2に、初職の地位に限定した議論では、職業アスピレーションと地位達成との関連が過小に見積もられている可能性があるという点である。本稿では、職業アスピレーションと実際の地位達成との関連は時点を重ねることに強まり、その結果、高卒2年目の職業アスピレーションが高かった人と低かった人の地位達成の差は、時点を追うごとに拡大することが明らかとなった。つまり職業アスピレーションと地位達成との関連を論じるとき、地位達成の度合いを初職の地位に代表させることには限界がある。離職や転職の経験が珍しくない若年層の地位達成を問題とする場合、長期的なキャリア形成の過程を考慮に入れる必要があることが示された。

(2) 今後の課題——職業アスピレーション独自の効果の内実

本稿では、職業アスピレーションが地位達成に対して、出身家庭や教育達成を媒介する効果だけでなく、これらの変数から独立した効果をもっていることが明らかとなった。しかしこの結果から、高いアスピレーションを抱けば高い地位達成が可能になる、と安易に結論付けることはできない。先述のとおり、アスピレーションには純粋な”*aspiration*”（動機づけ）の要素だけでなく、”*expectation*”（予期）の要素も含まれていると考えられている（Kerckhoff 1976）。高卒2年目の職業アスピレーションは、現状の客観的認識に基づいて、将来を逆算的に予期して抱かれている可能性がある。

とりわけ若年期の雇用状況が安定層と不安定層に二分されている（佐藤 2009）ことを鑑みると、若年層は高卒2年目の時点ですでに、将来の見通しを高く持てている層とそうでない層とに分断されていると考えられるのではないだろうか⁵。この場合、職業アスピレーションと地位達成との関連が時点を重ねるごとに強まることは、高卒2年目の時点の将来展望の差が時点を追うごとに現実となって表れていることを意味する。このとき職業アスピレーションは、地位達成のルートで生じる何らかの不平等を、本人の希望（アスピレーション）の問題として回収する機能を果たしてしまうのではないだろうか。

もちろんこのような主張をするのであれば、今回確認された職業アスピレーションの効果は出身家庭や教育達成をコントロールした上での効果であることも考慮に入れる必要が

⁵ この分断がいつの時点で発生しているのかを本稿のデータから明らかにすることはできないが、高校在学中あるいはそれ以前と考えられる。

ある。しかし、若年層の将来展望は様々な変数が複雑に絡み合って形成されると考えられ、出身階層や教育達成を統制するだけでは職業アスピレーションの”expectation”としての要素を否定することはできないように思われる。若年層の将来展望がどのような条件に基づいてどのように形成されるのかを精査し、それらの変数を統制した上で現職との関連を確認することが、今後職業アスピレーションの効果を正確に把握する上で求められるだろう。

引用文献

- 相澤真一, 2008, 「日本人の『なりたかった職業』の形成要因とその行方——JGSS-2006 データ分析から」『日本版 General Social Survey 研究論文集[7] JGSS で見た日本人の意識と行動』: 81-92.
- 荒川葉, 2009, 『「夢追い」型進路形成の功罪——高校改革の社会学』東信堂.
- 林拓也, 2012, 「職業アスピレーション再考」『社会学評論』63(3): 359-375.
- 片瀬一男, 2005, 『夢の行方——高校生の教育・職業アスピレーションの変容』東北大学出版会.
- Kerckhoff, A. C., 1976, "The Status Attainment Process: Socialization or Allocation?," *Social Forces*, 55(2): 368-381.
- Moore, W. E., 1969 "Occupational Socialization," Goslin, D. A., ed., *Handbook of Socialization Theory and Research*, Rand McNally & Company, U.S.A: 861-883.
- 内閣府編, 2013, 『平成 25 年版 子ども・若者白書』.
- 下村英雄・堀洋元, 2003, 「職業威信と安全性拡充のための社会心理学的装置の検討」『社会技術研究論文集』1: 258-267.
- 佐藤嘉倫, 2009, 「現代日本の階層構造の流動性と格差」『社会学評論』59(4): 632-647.

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトについて

労働市場の構造変動、急激な少子高齢化、グローバル化の進展などにもない、日本社会における就業、結婚、家族、教育、意識、ライフスタイルのあり方は大きく変化を遂げようとしている。これからの日本社会がどのような方向に進むのかを考える上で、現在生じている変化がどのような原因によるものなのか、あるいはどこが変化してどこが変化していないのかを明確にすることはきわめて重要である。

本プロジェクトは、こうした問題をパネル調査の手法を用いることによって、実証的に解明することを研究課題とするものである。このため社会科学研究所では、若年パネル調査、壮年パネル調査、高卒パネル調査の3つのパネル調査を実施している。

本プロジェクトの推進にあたり、以下の資金提供を受けた。記して感謝したい。

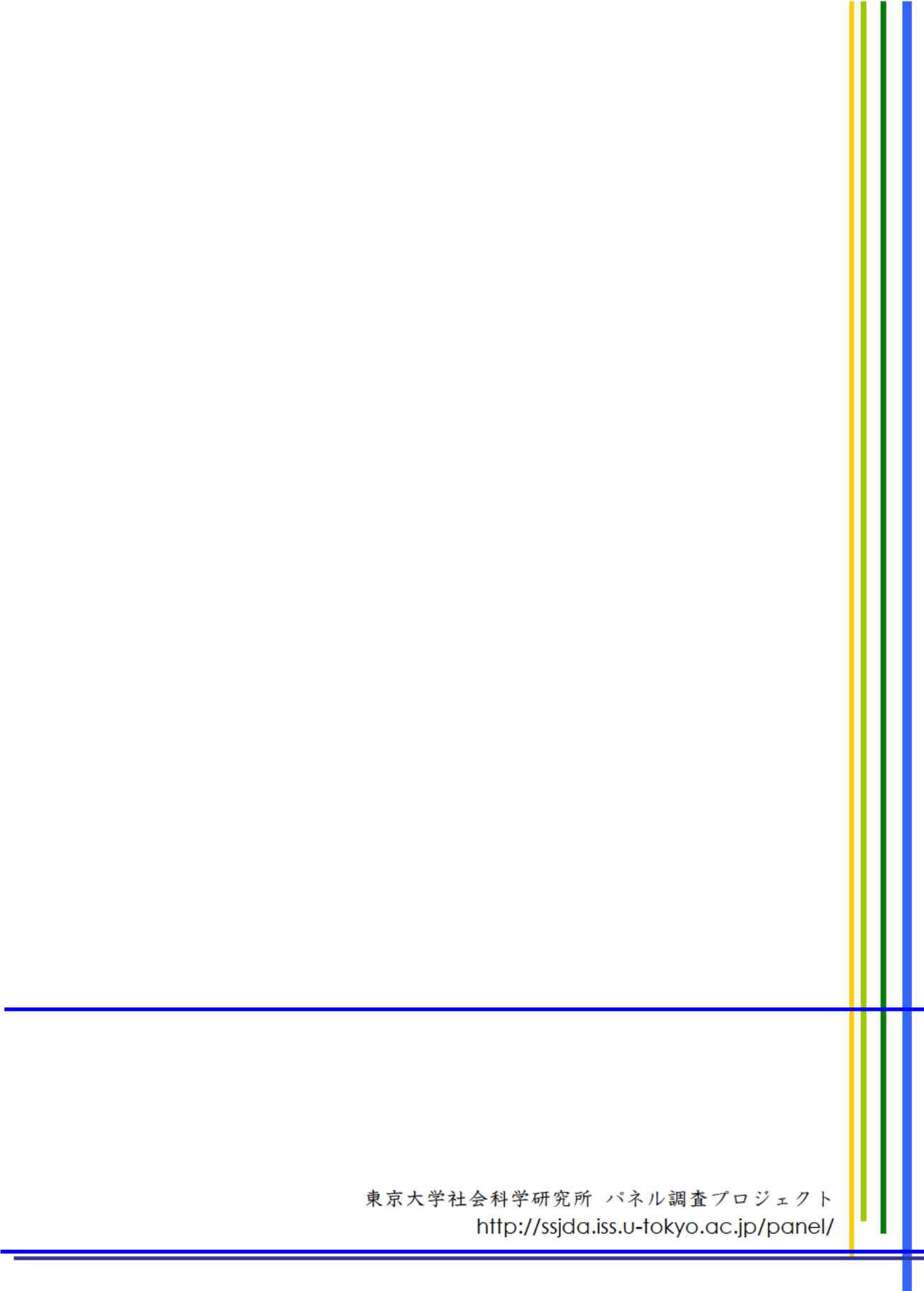
文部科学省・独立行政法人日本学術振興会科学研究費補助金
基盤研究 S：2006 年度～2009 年度、2010 年度～2014 年度

厚生労働科学研究費補助金
政策科学推進研究：2004 年度～2006 年度

奨学寄付金
株式会社アウトソーシング（代表取締役社長・土井春彦、本社・静岡市）：2006 年度～2008 年度

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクト ディスカッションペーパーシリーズについて

東京大学社会科学研究所パネル調査プロジェクトディスカッションペーパーシリーズは、東京大学社会科学研究所におけるパネル調査プロジェクト関連の研究成果を、速報性を重視し暫定的にまとめたものである。



東京大学社会科学研究所 パネル調査プロジェクト
<http://ssjda.iss.u-tokyo.ac.jp/panel/>